Views from Orienteering

村越 真

登山道のランクを示す看板の例（ニュージーランド）

登山道のグレーディング

美しさで定評のあるスイスの地形図を見た人は、登山道が３段階のランクに分けられているのに気づくだろう。赤、赤の破線、そして青。一番下の赤線は誰でも安心して歩ける遊歩道、その上が登山装備が必要な登山道、さらにその上が氷河の横断などもあるアルパインルートである。それぞれに必要な技術の詳細は登山地図の裏情報にも描かれている。また、ニュージーランドでは自然の中のトレイルは５段階になっており、最上位のランクの道のスタートにはそれを示す標識があった。

その登山道がどのくらいのスキルを要求するかを知り、自分のスキルを把握していればこそ、あるルートを歩いた時、自分でリスクをコントロールできるかが分かる。山での自己は自己責任とはよく言われるが、本来の「責任」という言葉は、「responsible」、つまり状況に対応できる能力を持つことを意味している。場所のリスクと自分のリスク対応能力を把握できて初めて、原義での責任が取れるのだ。

日本も早くコースの管理状況についての情報を出すべきだ、とずっと考えていた。この思いは、多くの山岳関係者共通だったらしく、昨年（2014 年）から、長野で主要な登山道のグレーディングが公表され、いっきに広がりつつある。技術的な面で５段階、体力的な面で10段階に登山道のランクが分かれているので、マトリックスで 50 種類の登山道があることになる。実際には体力的な要求の厳しい登山道は技術的にも厳しいので、50 種類ということはない。だが、「これまで落ちたら死ぬでしょ」という剱岳の登山路から高尾山の道まで区別がなかったことを考えれば格段の進歩だ。体力の 10 段階については、鹿屋体育大学の山本先生が運動生理学の知見に基づき指標を作成している。

https://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangyo/kanko/gure-dexingu.html#g

一方、技術の５段階については、それぞれに対応する登山道の典型的な状況と登山者に求められる技術や能力が定義されている。たとえば下から３番目（中間）のランク C では「はしごやくさり場、場所によっては雪渓や渡渉箇所もあり、ミスをすると転落・滑落などの事故の可能性がある、案内標識が不十分な箇所も含まれる」とある。そして必要な技術として「地図読み能力、はしご・くさり場を通過できる身体能力」とある。さらに注釈を見ると、地図読み能力とは「地図を見て自分の位置を知ることができ、目的地へのルートを識別できる能力」とある。ナヴィゲーションスキルについては、その他に登山道のない場所／分かりにくいところで安全なコースを見つけることができる能力であるルートファインディング能力が区別されている。個々の場所でその技術が要求されるかどうかを判断するにはそれなりの知識と経験がいるが、明確かつ的確である。こんな指標があると、私達オリエンティアが、そのスキルをもとに一般登山者に読図を教える時にも参考になるだろう。

五輪から「最も遠い」スポーツ

今では東京五輪といえば 2020 年のことを指すが、古い人間にとっては今でも東京五輪といえば 1964 年だ。当時私は４歳だったので、東京五輪の生の記憶は全くない。

その東京五輪での陸上や水泳といった主要種目で惨敗して、国民の体力レベルを底上げする必要が痛感された。とは言え、今のようにエアロビクスという概念もジョギングブームもなかった時代、一般大衆が運動に親しむためにゲーム性を持ったオリエンテーリングが健康体力作りにうってつけのスポーツとして北欧より導入されたのが 1966 年だった。

それから半世紀が経ち、オリエンテーリングはもうすぐ日本導入 50 年を迎える。一方で二回目の五輪は競技場の問題などでごたごたしている一方、IOC の方針転換で開催地が追加種目を導入できるようになった。追加種目の対象は 33 競技団体。これらはいずれも IOC によって五輪の認定種目となっている国際的なスポーツだ。オリエンテーリングもその一つだ。東京五輪の組織委員会から応募書類が送られたのが５月上旬。６月上旬にオリエンテーリングも含めた 26 種目が申請書を提出した。

サーフィンやスカッシュのようにマイナーだが知名度はあるスポーツもあれば、大会組織委員会の森会長の言を借りれば「どんなスポーツか分からない」スポーツもあった。野球・ソフトボールのようにメジャーだが、五輪実施種目から外れてしまったスポーツを除けば、その多くは「マイナー脱却」を大きな目的としていた。オリエンテーリングも例外ではない。残念ながら８種目に絞り込まれた時点でオリエン

テーリングはリストから外れてしまったが、新聞記事にはなった。PR という点では一定の役割を果たしたと言えるだろう。

今回の追加種目の基準はいくつかあるが、国際的な人気、特に若者へのアピール、入場券収入、実施にかかる費用などが重要な要素として上げられていた。またこれまでの流れからすれば、メディアと視聴者をひきつけることも重要な要素でもあった。申請書の項目の中には、どの程度メディアによって放映されているか、入場収入に関する項目もあった。もともと自然の中で行われるアウトドアスポーツであるオリエンテーリングは、メディアや観客という点で圧倒的に不利な位置にあった。現在では都市公園や欧州の複雑な市街地での種目も開発してきた。また北欧では TV 番組も試みられているが、基本的に観戦や TV での放映には向いていない。場合によっては、会場となるスポーツ施設すらなく、公園の中に作られた仮設のスタート・フィニッシュが会場となることもある。

その意味では、オリエンテーリングは五輪に最も遠いスポーツと言えるかもしれない。だがそれはメリットでもある。国立競技場の改修問題が錯綜したが、オリエンテーリングには巨額な費用のかかる施設は必要ない。その分環境にも優しい。オリエンテーリングの競技会場といえるのは、競技のための精密な地図だが、競技後はその地域でのオリエンテーリングの普及やアウトドアナヴィゲーション習得のツールともなり、多くの市民が気軽に利用できるものになる。

残念ながら、若者への普及という点でも十分ではない。オリエンテーリングは自然の中で行われる地味なスポーツである。住み慣れている都市とは異なる自然に、自らの力で挑戦しなければならない。見栄えのするプレーにも乏しい。地図という情報源を駆使して、針路を決めなければならない。だが、これも裏を返せば、現代の若者が 21 世紀を生きていく上で必要な力を提供するスポーツといえる。計画を立てる、その計画実行のためのリスクを予測し、それに対処する。そのために、地図という情報源から自分の目的に照らし合わせて必要な情報を得る。これらはいずれも、グローバル化した社会を生き抜く力として OECD が提唱しているキーコンピテンシーに近いものだからだ。

現代の五輪、そしてそれに牽引されたスポーツの形ができたのは、ロス五輪以来たかだか３０年に過ぎない。持続可能で、若者に希望とともに生きる力を与えるスポーツのあり方が問い直されるとき、案外オリエンテーリングは五輪に最も近いスポーツになるかもしれない。

（村越 真）

信州（長野）山のグレーディングの一部。
キャラクターには山岳漫画で有名な島崎三歩氏が描かれている